# ネパールの防災に協力しよう

学校所在府県：滋賀県
学 校 名：滋賀県立守山中学校
名　　前：倉　公一（社会科）
実践教科：社会(公民分野)、
　　発展学習ソーシャルスタディ

指導時数：５時間
対象学年：中学３年生
対象人数：80 人（２クラス）

## 1. 教師海外研修を通して感じたこと

グローバル化が進む世界。私が中学生だったときと比べると、身近な地域や生活の中において海外からの物や様々な国から来た人々と出会う機会が増え、何よりインターネットを通して膨大な情報によって知識として世界のことに触れることが多くなったと思う。しかし、「情報を得る＝理解できた」と考えていいのだろうか。私は、グローバル化が進む現代に生きる子どもたちに、世界と日本のつながりや世界の人々との関わりをより生きた教材を用いて伝え、広い視野や多様な見方を持つことの大切さを伝えたいと思いこの教師海外研修に応募した。

今回の教師海外研修で特に印象に残っていることは、ネパールの人々とともに歩む日本の JICA や NGO の援助の姿勢であり、また援助されるだけではなく自ら立ち上がろうとするネパールの人々の力強い姿であった。開発途上国というとどうしても貧しく援助に頼っているというイメージが子どもたちにも私自身にもあり、援助というとどうしても「してあげる」というイメージがあったが、今回の研修において、青年海外協力隊や海外ボランティアの方たちが、ネパールの人々の自立を促すために様々な工夫をして活動に取り組んでいること、またネパールの人々もそれに応えて自らの国を良くしようと努力されている姿を実際に見て、目を見開かされる思いに至った。そこには世界の人々との関わりや協力し合うことにおいてとても大切なことが秘められていると感じた。ホームステイや学校への訪問を通じて感じたネパールの人々の生き生きとした姿、そして私がこのネパールでの教師海外研修を通じて「実際に見て感じた」ことを生徒たちに伝え、世界の人々とともに助け合い様々な問題に取り組んでいくことの大切さを、これからの子どもたちにぜひ伝えていきたい。

## 2. カリキュラム

### （1）実践の目的・背景

本校の社会科では１年生の地理的分野の学習から開発教育の視点を取り入れて授業を行ってきた。東南アジアではパーム油に関わる熱帯林の開発を、アフリカではカカオに関わる児童労働の問題を、ブラジルではアグロフォレストリーの取り組みを取り上げ、持続可能な開発において大切なことは何かという視点を常に取り入れて授業実践を行ってきている。また、本校はスーパーグローバルハイスクールの指定も受け高校において SDGs に視点を置いた取り組みも行っており、それに連なっていくことも視野に入れて実践を行った。グローバル化の中で自らが多様な視点を持ち広い視野で世界を見ていくこと、そして「持続可能な開発」とはどういうことなのかをとらえていけるように進めていく。

今回は社会科の発展学習「ソーシャルスタディ」の中で、「日本の途上国への協力」をテーマにした授業の一環としてネパールでの日本の防災協力をもとに進めていった。授業の目的としては、ネパールの人々の生活を知ることで日本とは違う多様な文化の存在や価値観があることに気がつくこと、そして防災をテーマにして日本からどのような協力ができるかを考え、適切な援助の在り方や協力の仕方について生徒たち自身で考えること、気づくこととした。特に、日本から「援助」をする上で大切なことは何かという点において、多様な文化や価値観の違いを認めて助け合うことや、援助される側の人々とともに歩むこと、援助される側の人々の立場に立って考えることの大切さに気づかせたい。「魚を送るのではなく魚の釣り方を教える」という言葉があるように、ネパールの人々の自立につながるような援助の方法にも気づいてほしいと思う。また、2011 年の東日本大震災のことにも触れ、日本に住む外国人を対象とした防災での取り組みについても意識させていきたい。

（2）授業の構成

| 時限・テーマ・ねらい | 方法・内容 | 使用教材 |
|---|---|---|
| **1時限目**<br>「援助」する前に考えよう<br>ワークショップ<br>＊ものやお金を送る援助について考える。 | ●「一枚の看板」のワークショップをグループごとに行う。<br>●お金を寄付して援助することについて、賛成・反対の立場からそれぞれ意見を出し合う。<br>●「援助」することの意味についてそれぞれが認識を深める。 | ●DEAR（開発教育協会）の教材<br>●教材プリント<br>●ワークシート |
| **2時限目**<br>ネパールって<br>どんな国？<br>＊写真を通じてネパールの現状について気づく。 | ●ネパールについて自分たちが持っているイメージを確認。<br>●パワーポイントでクイズをしながらネパールの人口や日本にくらすネパール人が増えていて身近なところでネパールの人と出会うことを紹介。<br>●フォトランゲージを行い、ネパールについて気づいたことを交流し合う。 | ●パワーポイント<br>●今回の海外研修で撮ってきたネパールの写真 |
| **3時限目**<br>ネパールの防災に<br>協力しよう①<br>＊自分たちが学校や地域、家庭で取り組んでいる防災の取り組みをもとにネパールの地震対策について考える。 | ●2015年にネパールが大地震に見舞われ多くの被害を受けたこと、現在も復興途上であることを紹介。<br>●同じ地震大国として防災について先進的な立場にある日本からネパールに何か協力することはできないか、各グループでネパールでの防災協力のプランを考える。<br>●グループのプランを発表し合う。 | ●パワーポイント<br>●ワークシート<br>●画用紙（白） |
| **4時限目**<br>ネパールの防災に<br>協力しよう②<br>＊ネパールの現状をもとによりよい防災の取り組みについて考える。 | ●前時に考えたことを振り返る。<br>●ネパールの状況を示す写真や資料を提示。<br>●新たな資料を見て前時に考えた自分たちの防災プランを修正する。<br>（ネパールの現地の状況をもとに考える）<br>建物の状況、教室の机、宗教の問題、食べ物の問題、貧富の格差、教育の問題、言葉の問題など<br>●自分たちの防災プランのどんな点をどうして変えたのか、グループで話し合い発表する。 | ●写真<br>●ワークシート<br>●画用紙（ピンク色） |
| **5時限目**<br>国際協力で<br>大切なことってなに？<br>＊適切な援助とは何か、国際協力の在り方について考える。 | ●防災プランで1回目と2回目でどんな点をなぜ変えたかもう一度振り返る。<br>●実際にどのような取り組みが行われているのか、今回の教師海外研修で訪れたネパールのNGOのINSECの取り組みや青年海外協力隊の吉積さんの取り組み、私たちの防災訓練を紹介。<br>●国際協力や援助の上で、現地の人々のことを最優先して考えることや、現地の人々が主役となり自立していくことの大切さに気づかせる。<br>●これまで学んできたことをもとに、滋賀県に居住する外国人向けの防災の取り組みについて考えてみる。 | ●パワーポイント<br>●現地で撮影した動画<br>●ワークシート |

## 3. 授業の詳細

### 1時限目：「援助」する前に考えよう　ワークショップ

ねらい…自分たちが持っている「援助」に対する認識に気づき
「援助」することの意味について考える。

◆内容◆

① 「1枚の看板」の資料をもとにお金を村に寄付するかどうかグループで話し合う。

② 新たな説明カードを配り、アイ子の活動に賛成するか、反対するか、理由とともに考え、グループ内で意見を交流する。

③ 「援助」について自分たちが持っている意見や考えについて確認する。

【賛成】▶ わずか 10 ドルの寄付でも村の小学校が大いに助かるのであればするべきでは。
▶ 困っている人がいるならたすけるべき。

【反対】▶ ちゃんと 10 ドルが村の小学校のために使われるのかわからない。
▶ お金を渡すのでは村人がそれに頼ってしまうのではないか。

◆所感◆　40 人のクラスで 4 人× 10 グループを作り意見交流を行ったが 10 ドルを村の小学校に寄付するということには、どちらかというと反対という意見が多かった。やはりお金がどのように生かされるのか、一時的にではなくこの後どのようにお金が生かされていくのかなどの点が明らかではない、自立につながらないのでは、といった意見が見られた。お金を援助するだけでは適切な援助といえない点に生徒たちも気づいているようだった。

## 2時限目：ネパールってどんな国？

ねらい…ネパールを日本との比較などを通じて知り、身近に感じる。写真からネパールの現状について自ら考える。

◆内容◆
① ネパールのイメージを生徒たちに発言させる。
② ネパールの国旗を示し、その意味を説明。ネパールの位置を確認する。人口や面積についてクイズ形式で確認。
③ ネパールの写真を提示。写真からネパールのどんなことがわかるかグループで話し合い、ワークシートに記入。

**ココがポイント**

写真からどんなことに気がつくか、その気づきを大切にしたい。カトマンズの市内には日本への留学を斡旋する会社の看板が見られます。現在、来日するネパール人の数は急増しているとのことです。

日本とのつながり

日本への留学を斡旋する業者の看板

ネパールの食べ物、ダルバート

町の様子、信号がついておらず警官が交通案内

都市と農村の格差に驚き

村の学校に通う子どもたち

都会の学校の子どもたち

道路に牛がいる
ヒンドゥー教が信仰されている

**生徒の反応**

▶ 私は授業を受けるまでネパールのことはほとんど知らなくて漠然と農業で生活しているイメージを持っていたのですが、授業を受けてみて貧富の差の大きいことや排気ガスによる大気汚染がひどいことがわかりました。67,400 人ものネパール人が日本に来ているのになにも知りませんでした。2015 年には大地震も起きていて、今、日本が援助していると知り自分にはなにができるか考えたいです。
▶ 道路・電線・空気・学校など様々な面で整備されていなかったり環境が整っていないと思いました。日本で当たり前でもネパールではそれがあたりまでないことに気づきました。

◆所感◆　生徒たちが最初に持っていたネパールに対するイメージは同じアジアの国、高山の国、国旗が三角形で特徴的ぐらいだった。しかし写真を見たり資料を見たりする中で、ダルバートのように日本と同じく米を主食としていたり、日本に来ている人が多かったり、同じ地震大国だったりと、遠くの知らない国だったネパールに対して親近感を抱くようになっていった。一方で、写真からわかる農村と都市部の大きな格差に驚いたり、電気や道路が十分整備されていないことに気づいたりもしていた。生徒たちになにも先入観を持たせずフォトランゲージという形で写真から気がつくことを挙げさせると、思っていた以上にいろいろなことに関心を持ってくれたように思う。着ている服の色や道路のゴミやソーラーパネルなど一見気がつかないようなことを発見し着目している生徒もいた。

## ３時限目：ネパールの防災に協力しよう①

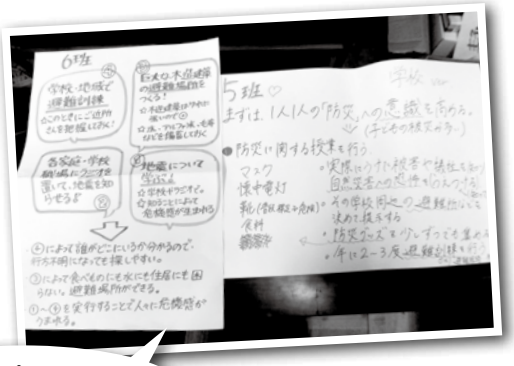
ねらい…2015 年にネパールで起きた大地震をもとに、同じ地震大国の日本で生きる私たちがどんな協力ができるか、自分たちの防災の知識などをもとに考える。

◆内容◆

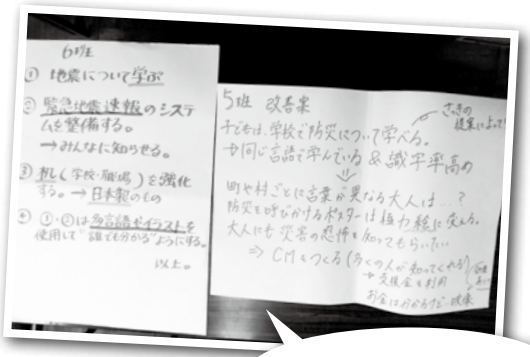
① 2015 年のネパール大地震の被害状況を写真や具体的な数字で示して学習する。
② 防災について自分たちが身近に行っていることや日本で当たり前にしていることをそれぞれ確認し、ネパールに提供し協力ができると思うことをグループで考える。
③ グループで考えたことを発表しあい、どんな点に注目したか意見交流する。

【防災に必要なこと】－生徒たちの意見より－

・正しい防災に関する知識　・防災グッズ　・食料や毛布の備蓄　・リアルな避難訓練
・避難マップの作成　・耐震性の強い頑丈な建物　・地震の情報を伝達するスピードのアップ
・地震体験者の座談会　・家族や近所で災害時の約束を決めておく　・道路の整備
・木を植えて土砂崩れを防ぐ　・家具のストッパーを配布する　・懐中電灯を配る　など



グループで出た意見をまとめる



授業の様子

◆所感◆　まずは中学生が自分たちの知っている範囲で防災についてできることを考えた。ネパール地震での建物の崩壊現場の様子を見せたこともあり、耐震性のある建物を日本からの資金や技術の援助で建てればいいという意見も多かった。一方でやりやすいこと、すぐ頭に思い描けることとして自分たちにとって身近な避難訓練や防災グッズを整えるという意見も多かった。また、防災プランを考える際に対象をどこにおくのか、都市なのか村なのか、家庭や地域での地震への備えにするのか学校での地震の備えにするのかを明らかにしておく方が生徒たちにとっても考えやすかったように感じた。また、短期的な防災対策なのか長期的な対策なのか、自分たちで進めることか国レベルで進めることかも、生徒たちには戸惑いがあったかもしれない。対象を絞って考えさせることも今後検討していきたい。

## ４時限目：ネパールの防災に協力しよう②

ねらい…ネパールの実情をさらに詳しく知ったとき、どのような協力が望ましいのかネパールの人々の立場に立って考える。

◆内容◆

① 新たなネパールの写真や識字率や教育のデータを提示し、グループでそこからネパールについての新たな情報を集める。
② 新たに得た情報をもとに、前時に考えたプランを見直し、改善策や新たなプランを考える。
③ どんな点を変えたのか、なぜ変えたのかという理由も挙げて新たなプランを発表する。

**ココがポイント**

日本ではあまり意識していない民族や言葉の違い、宗教や食べ物の違い、識字率の問題に対してどんな対応が必要か生徒たち自ら考えることができた。

【新たなネパールの写真（一部）】

あいさつは「ナマステ」ではなく「ラッソー」
民族が違うと言葉が通じないことも･･･

ベジタリアンの人もいます。
食べ物はどうしよう。

スマホを持っている高校生

レンガやコンクリート造りの学校、机も頑丈ではなさそう、教師の数も足りていない
地震は神の怒りと思っている人もいる

交通ルールをイラストで示してわかりやすく

若者は識字率が高いが高齢者ほど識字率は低くなり、女性への教育は十分ではない

【生徒が気づいたこと・新たに考えたこと】

| | | |
|---|---|---|
| ○ 識字率は大人が低い（特に女性） | → | 学校で子どもたちに災害時の対策法や知識を身につけてもらい家で家族に伝えてもらう |
| ○ 農村部と都市部で経済的に教育的にも格差がある | → | 学校で避難訓練を行うだけでは伝え方に差があったり学校に行っていない子はできないためラジオも活用する（言語はどうする？） |
| ○ 教師の数が少ない、識字率が低い | → | 避難マップを絵などでわかりやすく表す<br>紙芝居で伝える |
| ○ 防災バッグを備える | → | 非常食はヒンドゥー教の人もイスラム教の人も仏教の人もベジタリアンの人も食べられるようなものを用意する |
| ○ 電話線を引いても故障したりしそう | → | 災害を携帯を使って緊急音で知らせるような仕組みを作る<br>スマホが意外と普及している |
| ○ 机も弱いし崩れやすい建物 | → | 避難訓練ではすぐ逃げるようにした方がいい<br>防災意識を高めるためにネパール地震の日を防災の日にする |

◆所感◆　写真などをもとに生徒たちはよりネパールの人々に合った対策を考えられていたように思う。前の時間に考えていたことが「これ、無理やん」「こうした方がいいんちゃう」「こうしてもこれがあかんし」といろいろ試行錯誤しながら考えることができていたことが、国際協力のまず一歩になっていくのではないかと感じた。正解とは言えないものもまだまだ見られるが、ネパールの人々の立場で考えることや多様な文化を理解していくというねらいは達成できたのではないかと思う。

授業の様子

## ５時限目：国際協力で大切なことってなに？

ねらい…前時の学習から途上国への国際協力で大切なことは何かを確認する。

◆内容◆

① 防災プランで１回目と２回目でどんな点をなぜ変えたかもう一度振り返る。
② 実際にどのような取り組みが行われているのか、今回の教師海外研修で訪れたネパールの NGO の INSEC の取り組みや私たちの防災訓練を紹介。
③ これまでの学習を振り返り、国際協力を進めていく上で大切なことはなにかを考える。

**ココがポイント**

ネパールの先生らの防災教育や私たちの防災教育の取り組みを動画で紹介、現地に即した取り組みとはなにかを考える

ネパールの先生たちの防災教育の取り組み

**生徒の感想**

▶ 私たちの班では「こうしたいんだけどおかねはどうしよう」と、いつも話し合いは止まっていました。建物の耐震をあげるのもお金や人材が必要になってくるからです。だけど他の班の対策法の教え方を工夫する発表を聞きお金を使うだけが支援じゃないんだと気がつきました。

▶ 今回の授業で自分たちが考えた案がいいと思っていても、実際にそれが現地の人にとっていい方法とは限らないし、援助するには現地のことをよく知ることが大切なんだと感じました。またお金だけが援助とは限らないし現地の人や状況に合う援助がいかに大切かがわかりました。

▶ 私は最初お金を送ってそのお金で耐震工事や避難所を作ってはどうかと考えていた。しかしそれでは根本的な問題の解決にはならないことに気づき、継続的にできて現地の人にとってもプラスになるような案はないかと考えた。「子ども」に焦点を当てていくとさらに良い案ができたのではないかと思う。限られたもののなかで、できることはなにでなにを最も大切にして考えるかによって案も変わってくると思った。もっと国際協力について学びたいと思った。

## 4. 成果

今回、教師海外研修に参加するにあたって、以前から私自身の関心としてあった国際協力や適切な援助の在り方について考える授業をしてみたいと考えていた。しかし、実際に授業を実践してみると、研修を通して得た様々なことをあれもこれも用いたいと思ってしまい、十分に成果につながる実践ができたかという点では反省することも多かった。成果としては、ネパールでの写真をもとにしたフォトランゲージにおいてネパールに対する気づきからネパールを通して様々な文化への理解や共感を深めることにつなげることができ、その後の防災プランを考える授業にもつなげることができた。また、今回の教師海外研修のテーマが「防災」だったということもあり、防災をテーマに国際協力を考える授業を実践することができた。その中で、以前からあった資金だけに頼る援助への疑問や顔の見える持続可能な援助への思考を生徒たちにたどってもらいたいと思っていたが、その点では生徒の感想からも一定の成果が得られたのではないかと思う。生徒の中には総合的な学習において、地域の防災プランを考え、その中で滋賀県に住む外国人の人々にもわかりやすい防災の取り組みを考える上で今回の授業で学んだことを生かす姿が見られた。

## 5. 課題

今後の課題としては、海外への援助や国際協力について今回の授業を通じて学んだ視点を、生徒たちが身近な地域の課題にも生かしていけるようになることではないかと思う。日本国内に居住する外国人が近年増加している中で、そのような人々に対しての理解や協力を自ら進んで意識していけるような取り組みを進めていきたい。またネパールに関する今回の授業実践では、まだ研修を通じて学んだことのほんの一部しか生かせていないと思うので、今後も継続して教材づくりに取り組んでいきたいと思う。今後とも生徒の関心を高め考えを深められるような授業を試みていきたい。

**参考資料**　・参考文献　「「援助」する前に考えよう　参加型開発と PLA がわかる本」開発教育協会 2006 年
「開発教育実践ハンドブック」開発教育協会　2013 年改訂版
「ソーシャルアクションハンドブック～テーマと出会い・仲間作り・アクションの方法を見つける 39 のアイデア」
開発教育協会 2017 年